

## 時空の漂泊

(二〇一〇年十二月六日 第三十五号)

高橋 滋

### 広島便り

#### 二〇一〇里山を歩こう(五)

##### 身近な自然観察

佐伯のダイミョウセセリ(大名拵)

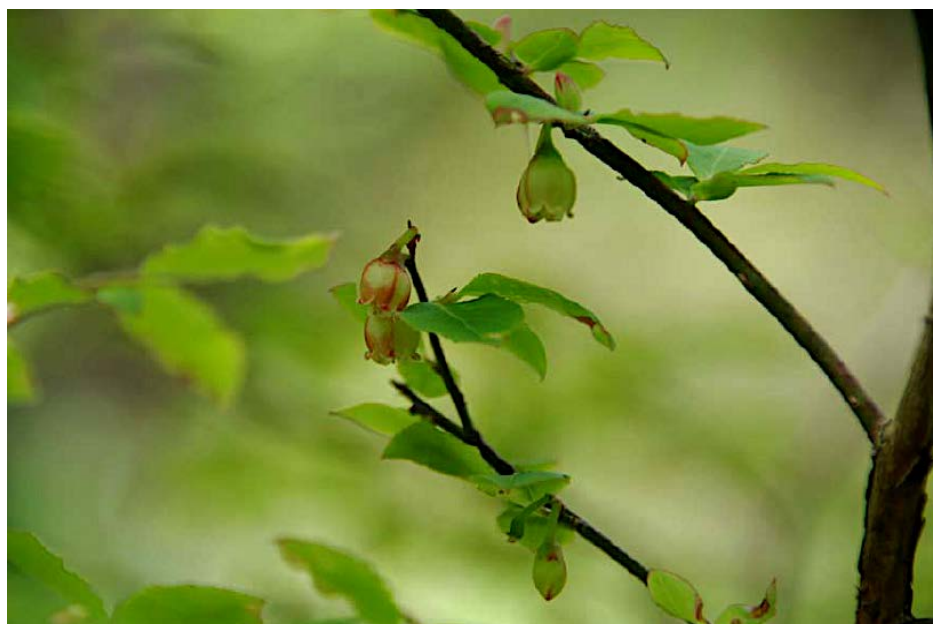
五月十四日(金)

佐伯の花上はながみの小屋は、この一週間あまりの良い天気で、一挙に濃い緑に包まれていた。春先の花は姿を消していた。

スノキ(酢の木)の花が咲いていた。  
ブルーベリーと同じ仲間のツツジ科のスノキ属。花の姿も、八月頃になる実も似ている。

しかし、スノキの実の付き方がまばらなので、同じツツジ科スノキ属でもナツ

ハゼ(夏櫨)の実がなるのを待つ人の方が多いように思う。





春先から、ヤマガラ（山雀）とシジュウカラが巣を争っていたが、巣箱に首を突っ込んでいたのはシジュウカラ（四雀）で、ついに勝負にはシジュウカラが勝ったようだった。



瞬間のことで一枚しか撮れなかったが、ダイミョウセセリ（大名拵）の写真を撮ることができた。ピントが合っていた。セセリにしては美しい色合いで、この色彩を持つ蝶は少ないと思う。

なお、「せせ・る」（拵る）とは、

「とがったもので繰り返しつつく。つついてほじくる。」といった意味で、「楊枝で歯をせせる」といったように使う。

蝶の触角の先は、普通は棍棒状だが、それが尖っていたりするとところから付けられた名前なのだろうか？。

セセリ蝶の仲間は体が太く、翅が短

く、しかも色も地味なものが多いことくらいゆる蛾がに間違われることが多い。

もっとも蝶と蛾との違いは厳密に言うと極めて難しく、分けないのが正解のようなのだが……………。

## 湯来町から東郷山

五月十五日（土）

佐伯の花上（左地図の左隅の印）の小

屋は山の中であり、今年は何一回、人里



の湯来町の和田というところ、湯の山温  
泉の近く（左地図の左上）で、地元の  
野菜作りを手伝っている。  
午前中の仕事（昼飯付き）なので、午  
後、東郷山（左地図の右中部）の方に行  
ってみた。山には入れなかったが、いろ  
いろ植物などの観察ができた。

まずはシソ（紫蘇）科の多年生草本の  
ラショウモンカズラ（羅生門葛）であ  
る。物々しい名前は、長さが四、五セン  
チにもなる花の形を、京都の羅生門で渡  
辺綱が鬼退治した時に切り落とした腕に  
見立てたのだという。





一条戻り橋で鬼の腕を切り落とす  
(歌川国芳・画、江戸時代)

次は、この季節から多く見る白い花である。後で調べてハイノキ(灰の木)と特定した常緑中低木である。

植物だけではない。蝶もいた。暫くみていないトラフシジミ(虎斑小灰蝶)も飛んで来た。とっさのことでピントが合わなかった。「尾状突起」(後翅の先

<http://www.weblio.jp/content/源綱>  
摂津源氏の源頼光に仕え、頼光四天王の筆頭として剛勇で知られた。大江山の酒呑童子退治や、京都の一条戻り橋の上で鬼の腕を源氏の名刀「髭切りの太刀」で切り落とした逸話で有名。謡曲『羅生門』は一条戻り橋の説話の舞台を羅城門に



の突起)もあり、波線の斑も入っていて、時期は早いものの、一瞬「ゼフィルスかな」と思わせた。

移しかえたものである。  
<http://www.weblio.jp/content/ハイノキ>  
<http://www.weblio.jp/content/トラフシジミ>  
翅の灰色濃淡のしま模様で、後翅にオレンジ斑を持つ。この翅裏のしま模様からトラフと名が付いた。翅表は黒地で、雄



帰り道、市街地を流れる八幡川の河原で黄色い花の群生を見た。写真を撮って、戻って調べたらジャケツイバラ(蛇結莢)だった。枝がもつれながらくねっ

は中心が青く輝く。  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/ゼフィルスシジミ>  
シジミチョウ(小灰蝶)の一群。

ている様子を蛇が絡み合っている様子に見立てて名付けられたという。大きくて立派な花である。八幡川の河原には多いのだが、これまでハッキリと見た記憶はなかった。

